

旅が人生を決める

「旅することは生きること」というフレーズは、デンマークが生んだ童話作家アンデルセンの詩の一節。旅先で、よくこのフレーズに納得する。これをタイトルにしたテレビ番組を作ったこともある。私にとって、旅することこそ、一番の楽しみであり、生きている証と考える。

今でこそ、海外旅行もするが、子ども時代には、まだ旅行は一般的ではなかった。父に伊豆の旅館に連れて行ってもらった記憶があるくらいで、ほとんど旅行をしたことはない。海外旅行など考えたこともなかった。大学に入ってから、やっと友人と国内旅行をするようになった。それから、どれだけの旅をしてきたことか。

素晴らしい風景も見だし、出会いもあり、たくさんの失敗もした。旅は、私にいろいろなことを気づかせ、教えてくれた。人生を変えるような気持ちになったのは、いつも旅先だったように思う。

宮澤 乃里子

私という人間のスタート地点

私は、国立大学の付属小学校から高校まで、似た環境の友人に囲まれて、学校生活を送った。今ほど、「お受験」が一般的でない時代に、試験を受けて入る小学校の友人は、ある程度以上の家庭の子どもだっただろう。先生や医者や役人の家庭が多かったようだった。中学、高校で、受験をして入学してくる「外部」と呼ばれる、勉強のよくできる少数の生徒の中には、違った環境の人もいたかもしれないが、ずっとこの学校で育った「内部」生は、だいたい同じ顔触れのまま十二年を過ごした。狭い世界の人しか知らないで育ったと言えるだろう。

小学校から電車通学だったので、近所の友達とは遊ぶなくなってしまった。制服を着て、皮靴を履いて、泥だらけで遊ぶ近所の子どもの横を通過していく、今思えば、嫌ら

しいエリート意識丸出しの子どもだった。先生は、「日本で一番いい学校に通っている君たちは、誇りを持ちなさい」が口癖で、教え子の東大入学率を自慢した。それを素直に受け入れていた。

大学で、初めて受験して、新しい友人と付き合うこととなった。私が入学した大学は、地方からの学生が多かったが、その当時、四年制の大学に来るのは、やはり裕福な家庭環境の人だったように思う。誰もが大学に進学する時代ではなかったから。

学校の成績の悪い人、経済的に大学に進めない人のことなど、関心もなく、考えたこともなかった。自分がとても狭い世界しか知らなかったことをはっきり認識し、価値観が、ひっくり返るきっかけは、やはり「旅」だった。

カニ族たちの知床旅情

大学三年の時だったか、夏休みに北海道に旅しようということになった。二十人しかいない学科のほぼ半数が参加することになり、夏休み直前に「この授業は、全員休みます」と担当教授に言いに行った記憶がある。ずいぶん失礼な学生だったわけだ。教師の気持ちなど、考えていなかった。今は教師の立場で、学生が、自分勝手な行動をするのに腹をたてているが、いつの時代も、この年令では、自分

勝手なのかもしれない。

その頃、森繁久弥や加藤登紀子が歌う「知床旅情」が流行っていた。北海道が旅先として、急に注目されて、リュックをしょって旅する若者は、カニ族と呼ばれていた。

当時は、飛行機で旅することなど考えられず、国鉄（今のJR）の均一周遊券を買って、旅するのが若者の旅のスタイルだった。学割も使えた。家庭教師のアルバイト代を貯めて、学割の北海道均一周遊券を買った。往きと帰りの長距離部分は一回しか有効ではないが、北海道内では乗り放題。急行は乗れるが特急は乗れないというチケットだった。東北新幹線は、まだなかったから、上野から夜行列車で青森へ。青森で青函連絡船に乗って海を渡り（関門トンネルもなかった）やっと北海道に入った。飛行機で一時間というのと違って「はるばる遠くへ来たもんだ」と距離を感じるスタート。北島三郎の歌う「はるばる来たぜ函館へ」という歌詞は、ピッタリだった。

北海道は、それまでに見たどの風景とも違っていた。とにかく広い。空が大きい。雄大な大地と鮮やかな色調に魅せられた。十人がいっしょに行動することもあったが、いくつかのグループに分かれて行動していたこともあった。層雲峡、知床岬、阿寒湖、など、観光地を回った。一番印象に残っている風景は、サロベツ原野の黄色の花のじゅうたん。さえないもののない原野の向うに利尻富士がそびえ

ていた。建物もなく人もいない、地球そのものを感じる風景がそこにあった。早朝に駅に到着したものの、駅からの足がなく、生まれて初めて、ヒッチハイクをした。トラックを止め、帰りはスクールバスに乗せてもらったことも、いい思い出になった。

この北海道旅行では、宿泊は、すべてユースホステルだった。ユースホステル協会に入会して、会員証と決められたサイズのシート（というより袋）を持っていれば、安く泊まれる。たしか一泊二食付四百円くらいだったのではないかったかと思う。仲間の誰がやってくれたのかは忘れたが、だいたいの日程表ができていて、ユースホステルもほとんどの日が予約されていた。予約確定の往復はがきの返事を持つての旅。夏の北海道は旅行者が多く、予約がないと泊まらないことも多かったので、予約葉書は大切だった。ユースホステルによって、予約葉書の仕様もさまざま、部屋も食事もさまざま、行ってみるまで、わからなかった。ペアレントというオーナーがいて、食事の後にミーティングがあるホステルが多かった。自己紹介したり、歌を歌ったりするのは、今なら絶対に嫌だ。でも、その頃は、旅行案内書もインターネットもなかったから、情報を交換する場として、必要だった。どこのユースの食事が美味しいとか、電車に乗る時、どちら側の席の景色がいいとか、バス停が駅から離れているから注意が必要とか、そんな生情

報を、ミーティングで得ていた。素敵な人に巡り合えるかもしれないという期待もなかったわけではない。学生もいたし、社会人もいた。関東の人ばかりでなく関西や九州の人もいた。私たちは十人のグループなので、グループ内の人人間関係で、手一杯。情報を得るだけで、あまり他の人たちとは、付き合わなかった気がする。

宿泊費を浮かすために、わざわざ遠い所まで行つて、夜行列車に乗ったこともあった。疲れてユースホステルにたどり着き、ほっとして皆で一休みしたつもりが、全員寝こんでしまい、目が覚めたら、夜中で、夕飯を食べそこなっていたこともあった。真つ暗な部屋にゴロゴロと死体が転がっているようで怖かった。しばらく何がおきているのかわからなかった。その光景は忘れられない。

本当にいいなと思えるユースホステルがあった。知床に近い街、網走にある友愛荘というユースホステルで、予約葉書も印象的で、行く前から期待していたが、期待以上だった。その頃、はやっていた「知床旅情」の元歌（北海道で昔から歌われているバージョ）を素晴らしい声で、ペアレント歌ってくれ、夕食は、どこよりもボリュウムがあるトンカツだった。スタッフも感じがよく、いろいろ旅の情報を教えてくれた。天都山という山の中腹に建っている比較的大きなユースホステルで、禁欲的な匂いのない自由な雰囲気のところだった。バーカウンターもあったり、タクシ

―相乗りのツアーも企画していた。

朝食後、お金を払って、ユースホテルを出発する時の挨拶は、「さようなら」ではなく「いつてらっしゃい、また帰っておいで」。この友愛荘では、「北海道をぐるっと回ったら、ここに帰っておいで」と声をかけてくれた。「はい、帰ってくるね。行つてきまーす」と、何気なく返事をした。本当に戻ってくることになるなんて、考えてもいなかった。

「たった一人だけど・・・」

数人が都合で先に帰ったので、帰りにいっしょだったのは、七人くらいだっただろうか。帰る準備を始めた頃から、私は迷っていた。北海道の自然、ユースホテルに集う若者との出会いから、今までの知らなかった何かが見えてきかけている気がしていた。ちょっと観光しただけで、北海道を去るのは、もったいないと思えてきた。もっと、北海道にいたくなった。仲間に旅の日程を延長しようと呼びかけてみたが、帰りに近くなると、お土産や家族の話が多くなり、誰も日程延長する気がないようだった。

一人で北海道に残るとしたら、どうするか。まずは泊まる場所を考えると、あの「帰っておいで」と言ってくれた網走のユースホテルしか思いつかなかった。あそこに行

くなら、どの列車に乗ればいいのか、今いる場所から、どのタイミングで、どの列車に乗ればいいのか、私は調べはじめていた。

均一周遊券での旅は、時刻表が絶対の必需品。時刻表といえは、あの交通公社が出している分厚い日本全国版だ。誰かが持つて来た時刻表を調べているうち私も時刻表の読み方を覚えてしまった。数字は苦手だが、時刻表は面白かった。時刻表だけで、架空の旅ができる。限りなく旅の夢は広がっていった。あのユースホテルに戻りたいと思った時から、時刻表で、どの列車に乗ればいいのか、架空の旅の計画をたてていた。最後の二日くらいは、観光よりも、このまま帰るか北海道に一人で残るか、そのことばかり考えていた。一人旅をしたこともないから自信はなかった。でも、北海道に残りたい気持ちは、おさえられなかった。どうしよう、どうしよう、と一人で思い悩んでいた。このまま帰ったら一生「あの時に勇気があったら、違う人生が開けたかもしれないのに・・・」と、後悔するだろうと思った。でも、なかなか、ふみきれなかった。

「後悔しない道はどっち？」

そうこうしているうちに、最後の日。函館に向かう列車に乗ってしまった。決心はつかない。きつと、このま

ま何も起こらず、東京に帰って、いつもの毎日を過ごすことになってしまうのだろうかと思った。何度も時刻表を調べていたので、網走に戻ることできる最終チャンスがいつ、どこなのかは、熟知していた。函館への列車は、その最終ポイントにどんどん近づいていた。ここを逃したら、もう、北海道旅行は終了してしまう。焦った。最終地点は確実に近づいていた。

最終地点が、なんという駅だったのが、覚えていない。ただ、覚えているのは、何もない草原にあるプラットホームのコンクリートの色、風になびいていた草の色。決断の時間が迫っていた。仲間は、にぎやかにトランプに興じていて、私の迷う気持ちなど、ぜんぜん理解していないようだった。

列車がホームに滑り込むと、ホームの反対側には、網走行の列車が停車していた。時刻表でしらべた最後のチャンスは、この列車だった。その列車は、私を呼んでいた。一瞬で、乗り移ろうと決心がついた。もう、何も躊躇する理由がみつからなかった。

リュックサックをおろし、「私、もう少し、北海道にいくことにする」と皆に告げ、ホームを横切り、向かい側の網走行の列車に飛び乗った。皆はトランプの手をやめ、驚きの表情で固まっていた。誰も何も言葉を発さなかった。あんなに迷っていたのに、列車の席に座った時には、もう

迷いはなかった。乗り込むとしばらくして、列車はホームから滑るように動き出した。こうして、私の一人だけの冒険はじまったのだった。もう、仲間のことを振り返ることもしなかった。

「自分だけが頼り」

背中をまっすぐにのびし、座席に座った。窓からの風景を新鮮な気持ちで、見つめた。仲間と一緒にいる時には、おしゃべりしたりトランプをしたりしていて、風景など気にも留めていなかったことに気がついた。ついさっきまでの集団の中の一人だった時と、何もかも違って見えた。緊張していた。頼りになるのは、自分だけ。しかも、今晚、泊まる所があるかどうかわからない身の上だった。世界が、空気が、ぜんぜん違っていった。

網走駅に着いた。こんなに殺風景な駅だったかと驚いた。列車を下りて、ホームに踏み出した一歩の足の間を今も鮮明に憶えている。私にとって新しい一歩だった。あのユースホステルは、駅から遠かったから、どうやって行くのかと思っていたが、構内を見渡すと、「ユースホステル友愛荘」と書いた幟を持ったお兄さんをみつけた。下駄ばきで、寅さんみたいにラクダ色の腹巻をした、お祭りの屋台にいなうなお兄さんだったので、声をかけるのを躊躇した。で

も、この人に聞くしかないのです、声をかけてみたら、親切に友愛荘まで、車で送ってくれた。駅から、こんな道を通り、こんな距離だったのか、一度来ているのに、すべては新発見のような気がした。

友愛荘についたが、ガランとしていて、何の音もしない。ちやうど宿泊客が誰もいない時間帯だったらしい。若者でいっぱい賑やかなあのユースホテルと同じ場所とは思えなかった。「帰っておいで」と言ってくれたお兄さん（健ちゃん）が出てきてくれ、話を聞いてくれた。ものすごい決心をして、やってきたのに、「あ、そう。来たの。じゃ、とりあえず、どこかの部屋で隙間のあるとこに寝て」みたいな感じだった。OKかNGか、どっちになるのかと緊張していたのに、肩透かしされたような気がした。特別に歓迎されてはいないが、拒否されてもいない。当たり前のことのように扱われた。「決心して来た」など言える雰囲気はないまま、当たり前のように、居ついてしまった。

一日目だけ、お客といっしょにトンカツの夕食を食べ、大部屋の隙間でシートにくるまれて眠った。翌日からは、スタッフとして仕事をしていた。朝は、会計をして「行つてらっしゃい」と送り出す。すぐに、私が特別に帰ってくることを期待されていたのではなかったことを知った。誰にも「帰っておいで」と健ちゃんは声をかけていたのだった。

「気が付いたら・・・」

気が付いたら、会計や金庫番、部屋割り、予約の葉書整理など、健ちゃんの隣で責任ある仕事をやり、健ちゃんといっしょに「いつてらっしゃい」と客に声をかけていた。

朝は、タクシー会社と提携して日の出を岬で見るツアーをやっていたので、申込者を起こして、車に分乗させる。朝食の手伝いとチェックアウト、客が帰ったら、朝食の後片付けと部屋の掃除。この年は水不足で、食器洗いや風呂掃除は、たいへんだった。

けものみちを歩いて、天都山の頂上まで散歩したりもした。そのうち、客がやってくるので、部屋割りと案内。夕食の支度、夕食作り、後片付け。キャンプファイヤーの準備。そしてミーティング。その後は、旅行案内カウンターを開いて、客の希望する観光の案内を時刻表と自分自身の経験や知識で、教えてあげる。ここで、北海道の地名の難しい読み方も覚えたり、時刻表の見方は、完璧に習得した。何人の旅行計画を手伝ったことだろう。

忙しい時間の自分たちの食事は、台所のちゃぶ台で交代に食べる。あったのは、ごはんと漬物くらいだった。烏賊の刺身が山盛りだったことが一度だけあったが、この烏賊が、何か違うと思った。今になって思えば、どこかから、刺身にした残りの三角の部分だけをもらったのか買ったのか

かと想像できる。とにかく、粗末な食事だった。トンカツは作って運んで、匂いを嗅ぐだけのお客さんのもの。健ちゃん、昼に冷蔵庫にあるトンカツの肉でチャーハンを作ってくれたことがあった。ゴロゴロ肉の塊の入ったチャーハンの味は久しぶりのご馳走で、その美味しさは、忘れられない。忙しかったし、街に出るのが大変だったので、昼ごはんは、ほとんど食べていなかったかもしれない。

あの頃、あそこに、居候は何人いたのだろうか？ フロントを任されている健ちゃんは、私より一歳年上の京都の人で、何年もここで、仕事をしているらしかった。駅にいた寅さん風の兄さんは、大阪の人。あちこちの大学のユースホステル研究会の学生も何人かいたし、何だかわからない若者もたくさんいた。夏は北海道で、冬になれば沖縄に行くというのが、正しい居候の姿だと教えられた。誰でも、いつのまにか居ついて、いつのまにかいなくなっていることが、ごく普通に繰り返されていた。だから私が仲間入りしたことも、何の抵抗もなく受け入れられた。

特別の存在などではないことが、心地よかった。生意気な話だけれど、旅行中、「どこの大学？」と聞かれると「某女子大」とか言ってごまかしていた。本当のことを言っても、ズズと音がするくらい引かれてしまった経験があったから。その頃は偏差値という概念はなかったが、超難関校の学生とわかってしまうと、皆、近寄ってこなくなった。牛

乳瓶の底のような度の強いメガネをかけたガリ勉女子大生を連想させる大学名は、旅行中は、邪魔でしかなかった。ここにいれば、学校名より、歌がうまかったり、薪割りが上手な方がえらいのだった。その価値観が、新鮮だった。

「つづいてるって自体が目的になった」

私が北海道に残ったのは、ユースホステルで、掃除したりトンカツを運んだりすることではなかったはずだった。北海道をもっと知れたかったはずだった。もちろん、お客さんと一緒に知床に行ったり、朝の能取湖ツアーやサロマ湖ツアーに空席があった時にでかけたりはした。でも、ほとんど友愛荘から出なかった。もう、北海道でも、どこでもよかった。友愛荘での生活こそが、私の目的になったのだった。

ユースホステルは、若者を観察する定点観測の場として最高だった。毎日百人以上の若者がやってきて、自己紹介したり、旅の話をしたりして、去っていく。また、別の若者がやってくる。今まで会うチャンスのなかったタイプの人も顔を合わせ、いっしょにたき火を囲み、同じ歌を聞いた。朝の出発の時には、皆と目を合わせ、声をかけあつた。一方的にこちらが、たくさんの方を観察しただけのことだけれど、たくさんの方との出会いは、私の心に強烈

な印象を残した。

旅行者は学生ばかりではなかった。同じ年齢でも、年下でも、もう立派に仕事をしている社会人がたくさんいた。私の高校では、大学に進学するのが当たり前だったので、社会人について考えたことがなかった。社会人の話は新鮮だったし、すごく大人に見えた。がんばっている社会人は素敵だった。

嫌な奴もいた。「僕は東大生」と何度も自慢げに言う男もいた。「だから、どうなの?」と言いたくなった。「学歴なんてなんぼのもんじゃ」と言う居候たちの方が正しいと思えた。

友愛荘に居候していた学生や風来坊も、私のこれまでの人生に登場したことのない人たちが多かった。勉強はできそうじゃない、スポーツやつてもダメそう、真面目に仕事もできなさそう、お金に縁がなさそう……マイナス面は、いっぱい見つけられた。でも、皆、楽しそうにフワフワ、ニコニコと生きていた。薪を割るのがうまい人、キャンプファイヤーの薪を積むのがうまい人、大勢を仕切るのがうまい人、歌がうまい人、片付けがうまい人……いろいろな特技があつて、いろいろな場で輝いていた。そして、皆、気持ちが悪かった。学校の成績と違う輝き方があるのだと、初めて実感したのだった。競争世界で、自分は、まあまあ上の方にいると思いがついていた自分が恥ずかしかつ

た。この経験がなかったら、テレビの仕事ができたかどうかもわからない。ドキュメンタリーなど上から目線で作つたに違いない。

友愛荘のペアレントは、当時二十五歳だったという。私より四歳しか上でしかなかったらしい。奥さんも子どももいたし、すごく大人に見えた。彼は、野心を持つ実業家だった。大学には行つてないが、実力があれば、学歴など必要ないことを示しているような人だった。歌はうまいし、かつこよかった。尊敬できる人だと思った。「来る者は拒まず、去る者は追わず」誰でも受け入れてくれた。「こころは、男女問題が起きないから、うまくいっている」と彼は言っていたが、たしかに、そういう諍いや噂もなく、若者の理想郷に見えた。

デカプリオ主演の映画「ビーチ」を見た時、若者だけの理想郷がうまくいっている場面では、友愛荘の日々を思い出した。「ビーチ」の若者たちのコミュニケーションは、悲劇的に崩壊していき、後味のよくない映画だけれど、この映画は、私の胸をざわつかせる。

病気療養のために滞在するというお嬢様「ヨッコさんが、友愛荘にやつてきた。色白の美人で、私よりちょっと年上。リュウマチを患っているとかで、一部屋を占領して、仕事もしないで暮らしていた。お客さんがいっぱいいて、一人一畳くらいに詰め込んで、それでも断っていたのに、特

別な人だったようで、別格の扱いだった。一人はつまらないからと、私も、その部屋に住むことになり、時間がある
と、病氣の話や人生論をたくさん聞かせてもらった。話術
のうまさなのか、人生経験の深さなのか、頭のよさなのか
その時は、素晴らしい人生の先輩と思えた。他の居候とは
違うタイプのヨッコさんの存在も、私にとって、友愛荘の
魅力の一部だった。

「二度帰ってから・・・」

もともとお金はギリギリしか持っていなかったから、一
か月もいたら、残りは少なくなっていた。でも、帰ろうと
は思わなかった。両親には、「もう少し、北海道にいるこ
とにした。心配しないで」と電話をしたが、市外通話はす
ぐに小銭がなくなってしまうので、一方的に宣言しただけ。
親は心配したに違いないが、その頃は、親の気持ちなど考
えなかった。

そのうち、親から手紙が来て、帰ってこないなら、押し
かけてくると言ってきた。親の気持ちを考えて、当然な
のに、この時は、どうやったら、ここに残れるかだけしか
考えなかった。ここの生活に酔っていたのだ。

このまま、「夏は北海道、冬は沖縄」というような自由
人になることにも憧れ始めていた。東京も大学も、たいし

て魅力を感じなくなっていた。いつかは戻るだろうとは漠
然とは思っていたが・・・尊敬できるヨッコさんに相談
し、健ちゃんに相談し、ペアレントに相談した。皆、そろ
って、「まずは、帰るべき」と言った。「親に説明して、許
してもらったら、また来ればいい」と。親に押しかけられ
ては困るので、とりあえず電話で、帰る約束をして、ひと
まず帰ることにした。

帰る日を決めて、皆に知らせた。自分の均一周遊券の有
効期限は、もう切れていた。でも、周遊券を取り換える
という裏技を2回使って、知らない名前の均一周遊券を持
っていた。お客さんの中にはまだ期限が残っている周遊券を
持っているのに、帰ってしまう人がかならずいたのだ。お
金はなくても、帰ることはできた。

どう、両親に説明しようか、そればかり考えていた。時
刻表で、帰る列車を調べたが、同時に、また来る時の時刻
表も調べていた。帰って、説明して、納得してもらって、
またここに来るのだと決めていた。親を説得して、理解し
てもらうことなど、できるわけがなかったが、その時は、
できると信じていた。

「なぜか涙が・・・」

私が網走を出る日、スタッフは、私を送るキャンプファ

イヤーをやってくれた。食事を作っているおばさんは、「汽車の中で食べなさい」とおにぎりを持たせてくれた。お給料と言って、二千円だったか三千円だったかも包んでくれた。キャンプファイヤーをしてくれた仲間たちは、そろそろと歩いて、網走駅まで見送りに来てくれた。夜行列車が滑り出すと、窓から皆が手を振ってくれている顔が順番に流れていった。にぎやかな見送りの声や姿が消えると、窓の外は、真つ暗な闇だった。涙が止まらなかった。幸せだと思った。涙は、皆への感謝だったのか、別れがつかかったのか、なんであんなに泣けたのかわからない。理屈ではなく、こみあげてくるものがあつた。他に客がいただろうに、たぶん声をあげて泣いていただろうと思う。こんなに泣いたことは、他になかった。これからも、こんな泣き方はしないだろう。とにかく泣けた。

そつと手渡された袋を開けると、たくさんの仲間からのカードや手紙が入っていた。ヨッコさんからの手紙には、勿忘草の押し花が貼つてあり「ヨッコよ。ヨッコよ。ヨッコよ。わすれないわよ」と書いてあつた。また泣けた。夜行列車の中で、ずつと涙がとまらなかつた。

夜行で網走を出て、朝、札幌に着き、また函館から青函連絡船に乗り、東北本線の夜行列車に乗った。車中二泊で、やっと東京に帰った時には疲れ切つていた。駅弁など買ったので、東京についた時には、所持金も二百円くらいしか

残っていなかつた。一か月の粗食で、体は痩せたが、胸は、いろんな想いでいっぱいだった。

「巣立ちの季節」

結局、両親に話しても、わかつてもらえなかつた。同年齢のいっしょに旅をした仲間できえ、「好きな人でもできちゃったの?」というくらいの反応だったのだから。

そのうち、話しても無駄と悟つた。あの感覚は、経験しなければわからないことは、私が一番よく知つていた。父の怒りは激しくて「かわいくなくなつた」と母を介して告げられた。それから何年も、父は口もきいてくれなかつた。それでも、授業が休みになつたら、どの列車に乗つて、どこで乗り換えて網走に行こうか、いつも考へていた。チャンスを逃さないように、いつも時刻表を持ち歩いていた。でも、結局は、網走に行くことはできなかった。これ以上、父を怒らせるわけにはいかなかったし、両親に監視されているような気がしていた。

親からすれば、家出されたようなものだっただろう。恋でもしたのかと思つたかもしれない。特定の人に恋したのではなかつたが、たしかに、私は、あの生活に恋していたのかもしれない。家庭に不満があつたわけでもないし、家出したつもりもなかつた。でも、親の気持ちをまったく考

えないで、自分勝手な行動をしたのは事実で、人の親になってみれば、親の心配や怒りはよくわかる。でもあの時は、素直に自分の気持ちに従っただけで、裏切るつもりはなかった。「ごめんなさい」とは言えなかった。

今、思えば、あれが、私の親離れだったと思う。両親も私のことを、思い通りにならない存在だと気がついたはずだ。何でも親に話す、勉強もできるいい娘は、ここで卒業。完全に親離れしてしまった。もちろん、申し訳ないことをしたと思っているが、後悔はしていない。

「網走に行きたい。行きたい」と思っていたが、その後、東京でヨッコさんに会って、行くのが怖くなった。「皆に好かれていたと思っていたかもしれないけど、実は裏では嫌われていたのよ。だからもどってはダメ」と言われたのだった。尊敬していた人の言葉だったので、ショックは大きかった。皆が信じられなくなり、思い出が壊れる怖さを感じて、友愛荘へ連絡するのも辞めた。仕事で北海道に出張することがあっても網走を避けていた。あまりに思い出がすばらしすぎて、がっかりするのが怖かったから。結局、十五年間、網走に行くことができなかった。

「十五年たって」

十五年がたった。私は、結婚して子どももいて、仕事も

順調だと自信を持てるようになっていた。どんなに思い出が崩れても大丈夫と思い、私の青春を振り返るため、友愛荘を訪ねてみたくなった。ユースホステルは、もうなくなっていたが、同じ場所に国民宿舎があった。あの場所に行ってみるだけではないと思って電話したら、電話に出たのが健ちゃんだった。

空港まで迎えに来てくれた健ちゃんの隣にはそっくりな顔の娘さんがいて、幸せそうだった。失われた時間をもどってきたように感じた。当時、友愛荘にいた仲間の何人かは、網走に住みついていて、大歓迎してくれた。ペアレントにも再会でき、誤解も解けた。嫌われていたわけではなかったことがわかった。皆、私の思った通り、裏などない人たちで、懐かしがってくれた。十五年もたってしまったが、網走を再訪してよかったと思った。モヤモヤも解消されたし、なぜ、あそこが好きだったか、わかった気がした。温かい人たちが、人間らしく暮らしていたからだ。自然体でいられる場所だったのだ。

その後、健ちゃんは、網走で自分の宿をはじめたので、よく泊まりに行った。健ちゃんの奥さんも、元友愛荘の居候だった人。母性にあふれた料理上手な人で、顔を見るだけで、ほっとできる。私は健ちゃんの家族が大好きだ。網走は、私の癒しの場所になった。

友愛荘では、私は「千夏ちゃん」と呼ばれていた。その

頃、歌が流行っていた中山千夏に似ていると誰かが言い出して、そう呼ばれるようになった。今も、その時の仲間、私を千夏と呼ぶ。千夏が私の出発点。網走は私の青春。肩書と関係なく自分が自分らしくいられる場所。私の原点は、あそこにあると思う。

「旅をしよう」

学生時代には、北海道だけでなく、東北、四国、九州にも旅をした。放送局に就職して、取材で日本全国を飛び回った。行っていない県はない。観光はしていないが、あちこちの空気感は知っている。子持ちのディレクターは忙しすぎて、観光旅行をするなどなかったが、子どもが大きくなって、やっと海外取材にも行けるようになった。思い出深いロケもあったし、いろんな場所、いろんな人にも出会えた。

今は、子育ても終了したので自由に観光旅行ができるようになり、ヨーロッパを中心に旅をしている。旅では、いつも発見がある。そして、一番の発見は、自分の発見という気がする。でも、お金も知識もない若い頃の旅の方が、得るものが大きかったと思う。

学生たちに言いたい。若いうちに旅に出なさいと。やっ

てダメなら戻ってくればいい。やらなかった後悔は、一生残る。だから、旅に出てほしい。きっと何かが見えてくるにちがいない。